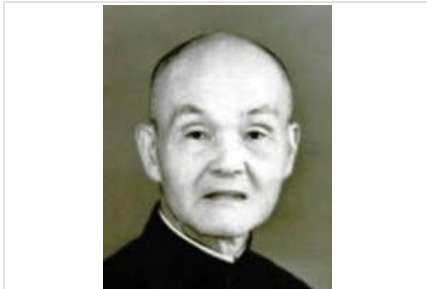


ナゴヤカルチャー

〈寄稿〉小笠原登の日記を読む



小笠原登



敬和学園大学教授・藤野豊さん

【寄稿：敬和学園大学教授・藤野豊】

●国策に抗し医療を実践

愛知県あま市甚目寺にある真宗大谷派の古刹（こさつ）・円周寺に小笠原登の日記と書簡、関連する書類などが所蔵されている。わたくしは2009年9月から同寺のご協力を得てこれらの文書の解読と分析を続け、今月、『孤高のハンセン病医師—小笠原登「日記」を読む』（六花出版）を刊行した。

1888（明治21）年7月10日、同寺に生まれた小笠原は、1915（大正4）年に京都帝国大学医科を卒業、1926年より同大学附属病院で当時は「癩（らい）」と呼ばれたハンセン病の医療に従事、1938（昭和13）年に皮膚科特別研究室の主任になった。当時の日本は、すべてのハン

セン病患者を生涯にわたって隔離する絶対隔離政策を進めていたが、小笠原は国策に抗してハンセン病患者の通院治療や退院を認める入院治療を実践した。それを支えたのは、ハンセン病は弱い感染症に過ぎず、発症には体質も影響しているから絶対隔離など必要はない、ハンセン病は治癒するという自らの医学的知見であった。

●家族も診察 安心与える

「日記」の1943年1月15日の条には、朝日新聞記者の取材に対する「細菌性ノ病気ナレバ隔離又ヨシ。シカレドモ菌ノ発見困難ナルモノヲ家計ヲ脅カシテマダ隔離スル要ナシ」という小笠原の発言が記されている。対米英開戦直前の1941年11月の第15回日本癩学会総会では、国策に沿い絶対隔離を進める医師たちから総攻撃を受けるが、それでも小笠原は絶対隔離に反対する医療を貫いた。

戦後、アメリカで開発されたハンセン病の特効薬プロミンやそれを国産化したプロトミンによる治療が始まり、ハンセン病は化学療法で治癒する時代が訪れた。しかし、それでも国は絶対隔離政策を改めなかった。1948年に京大を退官した小笠原は、国立豊橋病院の皮膚科医長に転じると、週末には円周寺に帰省し、ひそかに訪れるハンセン病患者を治療した。

「日記」の1951年7月29日の条には、妻子を伴って円周寺を訪れた男性患者のことが記されている。この患者は「妻に感染せしめたりとの素人判断にて共に死せんと妻に迫りしに端を発して遂（つい）に来訪するに至った」という。小笠原が診察した結果、妻子には異常がなく、患者は「喜びて帰去」した。絶対隔離政策から逃れて自宅で療養する患者にとり、家族への感染は大きな恐怖であった。家族もまた絶対隔離政策の被害者であった。小笠原は求めに応じて家族も診察し、そうした恐怖を打ち消している。

● 隔離政策の下で問題化

それだけではなく、小笠原は、豊橋病院の官舎の自室でもハンセン病患者を治療していた。1952年4月20日、ひとりの女性患者が小笠原の部屋を訪れた。その日の日記には、「毎日6時頃注射を行ふ事」としたと記されている。この患者は、以後、人のいない夕方に小笠原のもとを訪れて、小笠原が独自に購入したプロトミンの注射を受けている。

しかし、こうした自室での治療は絶対隔離政策の下では問題化し、豊橋病院内でも小笠原の立場は悪くなる。その後、小笠原は1955年に同病院を退職し、1957年から国立ハンセン病療養所奄美和光園の医官を務め、1966年に退職し、1970年12月12日、円周寺で死去した。享年82歳であった。

小笠原登の軌跡をたどると、そこに見えてくるのは、国策に左右されず、自らの医学的知見に基づいた医療を実践した医師の姿である。小笠原は、戦時下も戦後も一貫して学問の自由、研究の自由の大切さを身を以（もつ）て示したのである。国益のためなら人権を犠牲にしてもやむを得ないと政治が暴走しつつある今こそ、小笠原登の業績から多くを学びたい。

《ふじの・ゆたか》 1952年横浜市生まれ。文学博士。日本近現代史、人権論。著書に『ハンセン病と戦後民主主義』（岩波書店）『忘れられた地域史を歩く』（大月書店）など。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.